

現代ポルトガル語の無強勢母音弱化に関する若干の考察¹

Algumas observações sobre a redução de vogais átonas em Português moderno

牧野真也

MAKINO Shin'ya

1. はじめに

現代ヨーロッパの標準ポルトガル語（以下 PE）では、強勢母音 [é:] [é:] [á:] [ó:] [ó:] が派生や動詞活用などによって強勢を失うと、それぞれ [i] [i] [e] [u] [u] に弱化 *reduzido* するのが一般的である（～は「交替」、< は「通時的变化」を表す。pt.a. は「古ポルトガル語 *português arcaico*」の略）。

d[é:]do ≈ d[i]dal (< pt.a. *dedo* ≈ *dedal*); pr[é:]ga ≈ pr[i]gar (< pt.a. *prega* ≈ *pregar*);

g[á:]to ≈ g[e]tinho (< pt.a. *gato* ≈ *galão*);

f[ó:]go ≈ f[u]gão (< pt.a. *fogo* ≈ *fogom*); n[ó:]ta ≈ n[u]tar (< pt.a. *nota* ≈ *notar*)

他方、一部の形態では、[é:] [á:] [ó:] は長さを失うことは多いが音質は [e] [a] [o] のままである。

pr[é:]ga ≈ pr[e(i)]gar (< pt.a. *preega* ≈ *preegar*);

p[á:]da ≈ p[a(i)]daria (< pt.a. *paada* ≈ *paadaria*);

ad[ó:]ta ≈ ad[o(i)]tar (< pt.a. *adapta* ≈ *adoptar*)

史的には、前者が単母音 -V- に由来するのに対し (ex. *prega* ≈ *pregar*)、後者は母音接続 -V.V- の母音縮合 (ex. *pre.ega* ≈ *pre.egar* > *prēga* ≈ *prēgar*) や、核母音+尾子音 -VC- の C の脱落による代償延長 (ex. *adop.ta* ≈ *adop.tar* > *adōta* ≈ *adōtar*) に由来することが多い。そこで牧野 (2006¹) では、モーラ概念を援用し、音韻レベルで前者が 1 モーラの短母音 /^hé/ /^há/ /^hó/ を有するのに対して、後者は現代 PE においてもなお 2 モーラの長母音 /^{hh}é/ /^{hh}á/ /^{hh}ó/ を有し続けていると解釈した。そして、これらは音声レベルに至るまでに以下の音韻規則を蒙るものと仮定した。

/ ^h é/ / ^h á/ / ^h ó/	/ ^{hh} é/ / ^{hh} á/ / ^{hh} ó/	/ ^h é/ / ^h á/ / ^h ó/	/ ^{hh} é/ / ^{hh} á/ / ^{hh} ó/	音素 (音韻レベル)
不適用	不適用	[^h i] [^h e] [^h u]	不適用	無強勢短母音 ^v V の音質弱化
不適用	不適用	不適用	[^h é] [^h á] [^h ó]	無強勢長母音 ^{hh} V の短音化
[^{hh} é] [^{hh} á] [^{hh} ó]	不適用	不適用	不適用	強勢短母音 ^v V の長音化
[é:] [á:] [ó:]	[é:] [á:] [ó:]	[i] [e] [u]	[e] [a] [o]	異音 (音声レベル)

このように解釈することにより、音長を主要な音声的実現とする現代 PE の強勢の特徴や、共時的な母音縮合 (ex. *fic[ɐ ɐ]qui* → *fic[a]qui* は *fic/a^h a^hqui* → *fic/a^hqui* と解釈される。→ は「共時的変化」を表す)、強勢の有無と相関した硬口蓋子音前での二重母音化の有無 (ex. *r/ʃ^hcha* → *r/ʃ^hcha* → *r[ɕ^h]cha* ~ *r[ɕ^h]cha* に対して、強勢によるモーラ添加のない *r/ʃ^hch-edo* → **r[ɕ^h]ch-edo* は不適格)、短音化しない非弱化母音の存在 (ex. *p/a^hdaria* → *p[a]daria* ~ *p[ai]daria*) などを説明する基礎が与えられるからである。² だが現代 PE には、語源的には1モーラの音韻的短母音であると考えられるにもかかわらず、無強勢音節でも音質の弱化を示さない母音が認められる。そこで本論考では、辞書の音声表記を基礎資料として、強勢の有無に条件付けられた母音弱化の詳細について若干の考察を行うことにしたい。

2. 手順

- ① Academia das Ciências de Lisboa: *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporâneo* (2分冊 69426語; 略記 2001¹) と Porto Editora: *Grande Dicionário da Língua Portuguesa* (約 100000語; 略記 2004) の全見出し語に付された音声表記を精査し、無強勢母音が非弱化の語をすべて抜き出す(現時点では 2001¹ の第 1 分冊と 2004 の A~F で始まる見出し語が終了している)。
- ② ①の語が, Porto Editora: *Dicionários Editora da Língua Portuguesa* (電子辞書: 略記 2001²), Larousse: *Larousse de Poche Dictionnaire Français-Portugais / Português-Français* (略記 1996), Porto Editora: *Dicionários «Editora»: Dicionário da Língua Portuguesa 5.ª edição* (略記 1982), Larousse: *Dictionnaire Français-Portugais / Português-Français* (略記 1957) でどのように音声表記されているかを調べ、弱化・非弱化に関する変異の有無を確認する。
- ③ ①と②で得た資料を基に、語源的には1モーラ母音であると考えられるにも関わらず無強勢音節でも弱化しない母音を有する形態に共通の特徴を抽出する。

3. 結果と考察

上記2の作業過程において、語源的には音韻的短母音を有すると考えられるにもかかわらず無強勢音節でその音質弱化を示さない形態は、音韻論的・形態論的・意味論的その他の観点から、いくつかのタイプに分類可能であることが明らかとなってきた。以下では、そのうち比較的明確な基準によってグループ化されうる3つの類に焦点を絞って見てゆくことにしたい。

3-1. 意味的観点: 負の暗示的意味を有する派生語

名詞語基を基部とする派生名詞・形容詞で非弱化の語根母音を有するものには、負の意味合い、特に軽蔑的な暗示的意味(共示) *conotação* を有する語が多く見受けられる。以下に、若干の具体例を挙げる。

[á:]*gua* 「水」 ≈ [a]*gu-aça* (1982) ~ [ɐ]*gu-aça* (2004) 「俄か雨の後に地面を流れる汚い大水」; [a]*gu-aç-al* (1982, 2001¹, 2004) 「澱んだ汚い水溜り」 (cf. [ó:]*do* 「泥」 ≈ [o]*d-aç-al* (2001¹) ~ [u]*d-aç-al* (2004) 「ぬかるみ」「放縦な生活」); [a]*gu-aç-eira* (1982, 2001¹, 2004) 「胃の不調で口から流れるよだれ」; [a]*gu-aç-eiro* (1982, 2001¹, 2001², 2004) ~ [ɐ]*gu-aç-eiro* (1957, 1996) 「俄か雨」; [a]*gu-ac-ento* (1982, 2001¹, 2001², 2004) 「水浸しの」³

b[ó:]*bo* 「道化師」「愚かな, 馬鹿な, 浅はかな」 ≈ b[o]*b-agem* (1957, 2001¹) ~ b[u]*b-agem* (2004) 「愚かな・浅はかな言動, 考え」; b[o]*b-alh-ão* (2001¹) ~ b[u]*b-alh-ão* (2004) 「大馬鹿者」; b[o]*b-ice* (1957, 2001¹) ~ b[u]*b-ice* (2004) 「愚かな・馬鹿げた言動」

bod[é:]*ga* 「飲み屋」「不潔な家・部屋」 ≈ bod[ɛ]*g-ão* (2001¹) ~ bod[í]*g-ão* (2004) 「不潔な人」; bod[ɛ]*gu-eiro* (2001¹) ~ bod[í]*gu-eiro* (2004) 「不潔な人」; bod[ɛ]*gu-ice* (2001¹) ~ bod[í]*gu-ice* (2004) 「不潔さ」

b[ó:]*rga* 「どんちゃん騒ぎ」「放蕩」 ≈ b[ɔ]*rgu-ista* (2001¹, 2004) 「どんちゃん騒ぎが好きな人」「放蕩者」

b[ó:]*rla* 「有料物を不正にただで利用すること」 ≈ b[ɔ]*rl-ista* (2001¹, 2004) 「有料物の常習的な不正利用者」

br[é:]*jo* 「荒地」 ≈ br[ɛ]*j-eiro* (1957, 1982, 2001¹, 2001², 2004) 「荒地の住人」「不誠実な人; 放浪者; 助平」

c[é:]*go* 「盲人」 ≈ c[ɛ]*gu-eta* (1982, 2001¹, 2001², 2004) 「半めくら」; c[ɛ]*g-ada* (1982, 2001¹, 2001², 2004) 「盲人の群れ」「謝肉祭で, お面をつけ, 盲人のまねをして物乞いをしながら踊る集団」 (cf. c[í]*gu-eira* 「盲目」; c[í]*g-ar* 「盲目にする」)

ch[é:]*fe* 「長」 ≈ ch[ɛ]*f-ão* (2001¹) 「権力を乱用する傲慢な長, ワンマン」 (cf. ch[í]*f-ia* 「長の地位・職」)

ch[ó:]*cho* 「汁気のない」 ≈ ch[o]*ch-ice* (2001¹, 2004) ~ ch[u]*ch-ice* (2004) 「面白みに欠けるもの, 無味乾燥なもの, つまらないもの」; ch[o]*ch-inha* (1982, 2001¹, 2004) ~ ch[u]*ch-inha* (2004) 「覇気のないつまらない男」

ch[ó:]*na* 「眠り込んだ男」 ≈ ch[ɔ]*n-inha(s)* (1982, 2001¹, 2001², 2004) 「痩せた活力のない男」「優柔不断の役に立たない男」「女々しい男」 (cf. d[ó:]*na* 「女主人」 ≈ d[ɔ]*n-inha* 「颯」)

c[ó:]*po* 「コップ」 ≈ c[o]*p-ista* (1982, 2001², 2004) ~ c[u]*p-ista* (2001¹) 「大酒呑み」

f[ó:]*me* 「空腹」 ≈ f[ɔ]*me-n-ica* (2001¹, 2004) 「金銭にひどく執着する人」

名詞・形容詞に限らず, 非弱化母音を有する名詞派生動詞にもこのような意味を有するものが多い。

b[ó:]*bo* 「愚かな, 浅はかな」 ≈ b[o]*b-ear* (2001¹) ~ b[u]*b-ear* (2004) 「馬鹿げたことを言う」; a-b[o]*b-ar* (1982, 2001¹) ~ a-b[u]*b-ar* (2004) 「愚か者・浅はか者になる (+-se)」

c[ó:]*ca* 「(顔を覆うベールがついた) 頭巾」 ≈ des-c[o]*c-ar* (2001¹) ~ des-c[u]*c-ar* (2004) 「恥も外聞もなく振舞う (+-se)」

deb[ó:]*che* 「放蕩, 遊蕩, 身持ちの悪さ」 ≈ deb[ɔ]*ch-ar* (1982, 2001², 2004) ~ deb[u]*ch-ar* (2001¹) 「墮落させる」

endr[ó:]*mina* 「策略, 計略」 ≈ endr[ɔ]*min-ar* (2001¹, 2004) 「策略・計略を使つてくださす」

f[ó:]*fo* 「ふわふわの」 ≈ a-f[o]*f-ar* (2001¹) ~ a-f[u]*f-ar* (2004) 「ふわふわにする」「うぬぼれる (+-se)」

marr[é:]*co* 「せむし」 ≈ a-marr[ɛ]*c-ar* (1982, 2001¹, 2004) ~ a-marr[í]*c-ar* (2001²) 「せむしになる (+-se)」

n[ó:]*doa* 「染み」 ≈ e-n[ɔ]*do-ar* (2001¹, 2004) ~ e-n[u]*do-ar* (2004) 「染みをつける」「穢す, 傷つける」

pal[é:]*rma* 「馬鹿, 間抜け, 愚か者」 ≈ a-pal[ɛ]*rm-ar* (1957, 2001¹, 2004) ~ a-pal[í]*rm-ar* (1996) 「馬鹿・間抜け・愚か者になる (+-se)」

pat[é:]ta 「子供じみた愚か者」 \approx *a-pat[ε]t-ar* (1957, 1982, 2001¹, 2001², 2004) 「愚か者になる (+-se)」

p[é:]ste 「ベスト、疫病」 \approx *em-p[ε]st-ar* (1982, 1996, 2001¹, 2001², 2004) 「腐敗・墮落させる」「悪臭を放つ」

pin[ó:]ca 「いやに着飾った」 \approx *a-pin[ə]c-ar* (2001¹, 2004) 「いやに着飾る・めかしこむ」

これらの例においてまず第一に興味深いのは、「軽蔑的な共示を有する派生語では語根母音が弱化するのに対し、そのような共示を持たない語は、同一語基からの派生であるにも関わらず、語根母音が弱化する」ような場合である。*ch[é:]f-e* から派生した *ch[ε]f-ão* と *ch[i:]f-ia* における語根母音の弱化の有無と意味的差異が好例であり、*c[é:]g-o* から派生した *c[ε]gu-eta*, *c[ε]g-ada* と *c[i:]g-ar*, *c[i:]gu-eira* の差異も同様である。第二は、特に派生名詞・派生形容詞の形成において、それ自体が一般的に軽蔑的な共示を有する接尾辞が多用される点である。*-aça*, *-ice*, *-alho* が典型的な例であるが、その他 *-ão*, *-eta* も往々にして軽蔑的・侮蔑的な共示を有しうる接尾辞であり、*-ada* も集合を意味する場合は軽蔑的な共示を有することが多い造語要素である。これらは併せて、語根母音の非弱化が問題となっている語の軽蔑的な性格を明示しているといえるであろう。その他、個別的な例で興味深いのは *a-bob-ar*, *a-palerm-ar*, *a-patet-ar* である。これらは 2001¹, 2004, Houaiss (2001) のいずれにおいても類義語として扱われており、かつ、そのすべてが語根母音の非弱化現象を示しているが、これは偶然の一致ではなからう。また *agu-aç-al* と同一の形態構造・意味構造を有する *lod-aç-al* が同じく非弱化の語根母音を示し得ることもやはり偶然の一致とはいえないであろう。

以上の諸点は、軽蔑的共示の有無と語根母音の非弱化・弱化の間に何らかの関係があることを示唆していると考えられる。では、なぜこのような意味合いを有する語において無強勢母音の非弱化が観察されるのであろう。そこにはおそらく情意的な強調を表すモーラ添加が関与しているのではないだろうか。たとえば日本語で「たかい」を情意的に強調するために「たかーい」「たっかい」「たっかーい」などとモーラ添加が行われるように ($taka-i \rightarrow taka-i \approx taka-i \approx taka-i$)、またフランス語では *accent d'insistance* のもとで *impossible* の *p* にモーラが添加されて *imppossible* となるように (*Cet enfant est impossible*. 「この子はまったく手に負えない。）、PE でも *golo* 「ゴール」 \rightarrow *gooooooooo!* 「ゴーーーーール!」のように情意的強調によって語根母音の引き延ばしが頻繁に行われる。この点に関して、次のような非常に興味深い 1 節が Ciberdúvidas (ポルトガル語についての質問サイトで、専門家が一般の質問者からの質問に答える場として開設されている) に見出される。それは *você* 「きみ/あなた」の用法に関する質問への回答の「付記 *aditamento*」として載せられており、次のようなものである — “Tenho encontrado, aqui em Portugal, essa expressão utilizada com uma carga negativa. Oíço por vezes uma pessoa, como que querendo desvalorizar a outra, exclamar, com trejeitos de desprezo e carregando e prolongando excessivamente no «cê»: «você...» ...Rui Ramos 03/02/00” 「私は、ここポルトガルにおいて、この表現 {*você* のこと : 筆者註} が否定的な意味合いで用いられる場に何度か出くわしてきた。人がまるで相手を見下さんとするかのように、軽蔑で顔をしかめながら、*-cê* の部分に力を込め、そこを過剰なまでに引き伸ばして *você...* と言うのを時おり耳にする…」(これを記した Rui Ramos は Angola

の首都 Luanda 出身のジャーナリストである)。⁴ ここから明らかなのは、PE においては *você* の語根母音 *e* の引き伸ばしが明らかに「軽蔑・侮蔑」と関与していることである。

さて、もしこのような「情意的強調を示す語根母音の引き伸ばし」＝「語根母音へのモーラ添加」が上記のような句のレベルだけではなく「語形成レベルでも可能な過程」だとすれば、たとえば *bod[i]g-uice* ~ *bod[ɛ]g-uice* のような変異は次のような過程を経て生じるとは考えられないであろうか。

$\text{bod}^{\mu}\text{ɛ}g-$	$\text{bod}^{\mu}\text{ɛ}g-$	語根
$\text{bod}^{\mu+\mu}\text{ɛ}g-$	不適用	情意的強調を示す語根母音へのモーラ添加
$[\text{bod}^{\mu+\mu}\text{ɛ}g]\text{is}+e$	$[\text{bod}^{\mu}\text{ɛ}g]\text{is}+e$	接尾辞・幹母音付加
$\text{bo. d}^{\mu}\text{ɛ. gi. se}$	$\text{bo. d}^{\mu}\text{ɛ. gi. se}$	音節化
$\text{bo. d}^{\mu}\text{ɛ. g}^{\mu}\text{í. se}$	$\text{bo. d}^{\mu}\text{ɛ. g}^{\mu}\text{í. se}$	次末強勢付与
$\text{bu. d}^{\mu}\text{ɛ. g}^{\mu}\text{í. si}$	$\text{bu. di. g}^{\mu}\text{í. si}$	無強勢短母音の音質弱化
$\text{bu. d}^{\mu}\text{ɛ. g}^{\mu}\text{í. si}$	不適用	無強勢長母音の短音化

もっとも、先に述べたように無強勢語根母音の非弱化が生じる派生名詞・派生形容詞の形成において軽蔑的な共示を有する接尾辞が多用されるのは事実であるが、その一方で、そうした接尾辞の付加が語根母音の非弱化を自動的に惹起するわけではないのも事実である (ex. *c[á:]ra* ≈ *c[ɐ]r-aça*, *fanch[ó:]na* ≈ *fanch[u]n-aça*, *p[é:]rna* ≈ *p[i:]rn-aça*; *[á:]sno* ≈ *[ɐ]sn-ice*, *b[é:]sta* ≈ *b[i:]st-ice*, *idi[ô:]ta* ≈ *idi[u]t-ice*; *fr[á:]de* ≈ *fr[ɐ]d-alh-ada*, etc.). さらに、軽蔑の共示を持たない接尾辞が付加された場合にも無強勢語根母音の非弱化は起こりうる (ex. *b[ó:]bo* ≈ *b[o]b-agem*; *b[ô:]rga* ≈ *b[ɔ]rgu-ista*, *b[ô:]rta* ≈ *b[ɔ]rl-ista*; *br[é:]jo* ≈ *br[ɛ]j-eiro*; *b[ó:]bo* ≈ *a-b[o]b-ar*, *pal[é:]rma* ≈ *a-pal[ɛ]rm-ar*, *pal[é:]ta* ≈ *a-pal[ɛ]t-ar*, etc.). これらの事実は、問題の接尾辞は派生語の軽蔑的な性格を明示しているだけであり、語根母音へのモーラ添加自体は、上記のごとく、接尾辞の付加とは独立した過程であることを示唆していると思われる。また、本節冒頭の諸例から明らかなように、こうした語の多くは辞書によって、あるいは同一の辞書においても弱化的の有無に揺れがある。より包括的に見れば、負の共時的意味を有する派生語のすべてに無強勢語根母音の非弱化が生じるわけでもない。このことは、「情意的強調を示す、語根母音へのモーラ添加」の過程が — この仮説が正しいとすればの話であるが — 「自由形態素への接辞付加」に似た語形成規則の一種である可能性を示唆しているように思われる。⁵ なぜなら、まず語根母音の弱化的に揺れがあることは、語根母音へモーラ添加を受け得る形態素がモーラ添加なしでも用いられうることを意味しており (ex. *bod[ɛ]/g-a* ~ *bod[ɛ]/g-a*), これは自由形態素が幹母音を除き、語としての存立に他の接辞の付加を必要としないことと平行しているからである。次に、負の共時的意味を有する派生語のすべてに無強勢語根母音の非弱化が生じるわけではないことは、情意的強調による語根母音へのモーラ添加を受け得ない形態素の存在を意味しており、これは、ある与えられた接辞がすべての自由形態素に付加可能とは限らないことと平行しているからである。

3-2. 形態的観点：動詞語基への幹母音を介さない接尾辞付加による派生名詞・形容詞

ポルトガル語には、動詞から名詞・形容詞を派生させる手順として、動詞語基に対する接尾辞 *-çãõ*, *-dor*, *-tiv+o*, *-tóri+o* などの付加がある (+ は「形態素境界」を表す)。この手順による語形成では、多くの場合、動詞語基と接尾辞との間に動詞の幹母音 (語幹形成母音 *vogal temática*) が付加される (ex. $[\text{compar}+a]r \approx [\text{compar}+a]\check{c}ãõ$; $[\text{bat}+e]r \approx [\text{bat}+e]dor$; $[\text{part}+i]r \approx [\text{part}+i]tiv+o$; $[\text{fal}+a]r \approx [\text{fal}+a]tóri+o$: [] は「語幹」、_ は「動詞語基」を示す)。こうした派生名詞・派生形容詞では語強勢が接尾辞 *-çãõ*, *-dor*, *-tiv-*, *-tóri-* に置かれるので語根母音は無強勢となり、それが *a* である場合は音的に弱化する (ex. $[\text{compãr}+a]\check{c}ãõ$; $[\text{bãt}+e]dor$; $[\text{pãrt}+i]tiv+o$; $[\text{fãl}+a]tóri+o$: \grave{a} は弱化母音を表す)。この型の語形成に対して、こうした接尾辞が幹母音を介さずに動詞語基に直接付加される場合、それらは *-ãõ*, *-or*, *-iv+o*, *-óri+o* の形をとり、かつ、語根母音 *a* は弱化しない場合が多い (ex. $[\text{per}+suãd+i]r \approx [\text{per}+suãd+i]\check{c}ãõ \approx [\text{per}+suãs]\check{c}ãõ$; $[\text{rãpt}+a]r \approx [\text{rãpt}+a]dor \approx [\text{rãpt}]or$: \grave{a} は非弱化母音を表す)。次に挙げる形態は 1982, 1996, 2001¹, 2001², 2004 でこのような非弱化が観察されたものである。

$[\text{des}+per+suãd+i]r$	$\approx [\text{des}+per+suãs]\check{c}ãõ$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{dis}+suãd+i]r$	$\approx [\text{dis}+suãs]\check{c}ãõ$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{dis}+suãs]iv+o$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{dis}+suãs]or$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{per}+suãd+i]r$	$\approx [\text{per}+suãs]iv+a$ (2004); $[\text{per}+suãs]or$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{per}+suãs]óri+o$ (2004); $[\text{per}+suãs]óri+a$ (2004) cf. $[\text{per}+suãd+i]\check{c}ãõ$ (2004)

$[\text{suãd}+i]r$	$\approx [\text{suãs}]iv+o$ (2004)

$[\text{ante}+fer+i]r^6$	$\approx [\text{ante}+lãç]\check{c}ãõ$ (2004)

$[\text{au}+fer+i]r$	$\approx [\text{ab}+lãt]or$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{con}+fer+i]r$	$\approx [\text{co}+lãç]\check{c}ãõ$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{de}+fer+i]r \sim [\text{de}+lat+a]r$	$\approx [\text{de}+lãç]\check{c}ãõ$ (1982, 2001 ¹ , 2001 ² , 2004); $[\text{de}+lãt]or$ (1982, 2001 ¹ , 2001 ² , 2004); $[\text{de}+lãt]óri+o$ (2004)

$[\text{di}+fer+i]r \sim [\text{di}+lat+a]r$	$\approx [\text{di}+lãç]\check{c}ãõ$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{di}+lãt]óri+o$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{in}+fer+i]r$	$\approx [\text{i}+lãç]\check{c}ãõ$ (2001 ¹ , 2001 ² , 2004); $[\text{i}+lãt]iv+o$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{i}+lãt]iv+idad+e$ (2004)

$[\text{pre}+fer+i]r$	$\approx [\text{pre}+lãç]\check{c}ãõ$ (2004)

$[\text{pro}+fer+i]r \sim [\text{pro}+lat+a]r$	$\approx [\text{pro}+lãt]or$ (2004)

$[\text{re}+fer+i]r \sim [\text{re}+lat+a]r$	$\approx [\text{relãt}]or$ (2001 ¹ , 2004)

$[\text{trans}+fer+i]r$	$\approx [\text{trans}+lãt]iv+o$ (1982, 2004); $[\text{trans}+lãt]or$ (1982, 2001 ¹ , 2004)

$[\text{e}+vad+i]r$	$\approx [\text{e}+vãs]\check{c}ãõ$ (1982, 1996, 2001 ¹ , 2001 ² , 2004); $[\text{e}+vãs]iv+o$ (1982, 1996, 2001 ¹ , 2001 ² , 2004); $[\text{e}+vãs]iv+a$ (1982, 1996, 2001 ¹ , 2001 ² , 2004)

$[\text{in}+vad+i]r$	$\approx [\text{in}+vãs]\check{c}ãõ$ (1996, 2001 ¹ , 2004); $[\text{in}+vãs]iv+o$ (2001 ¹ , 2004); $[\text{in}+vãs]or$ (2001 ¹ , 2004)

しかしながら、同一の形態的文脈に置かれた語根母音 *a* のすべてが音声レベルで非弱化とは限らない。

[ante+lät]iv+o (2004); [ab+lät]iv+o (2001', 2004); [co+lät]iv+o (2004); [co+lät]or (2004); [di+lät]iv+o (2004); [pre+lät]iv+o (2004); [re+läch]ão (1996, 2001', 2004); [re+lät]iv+o (1996, 2001', 2004); [re+lät]óri+o (1996, 2001', 2004); [suäs]óri+o (2004)

また、辞典の間で揺れが認められる例も存在する。

[ab+läch]ão (2004) ~ [ab+läch]ão (2001); [pro+läch]ão (2004) ~ [pro+läch]ão (2001'); [trans+läch]ão (2004) ~ [trans+läch]ão (2001'); [per+suäs]ão (2001', 2004) ~ [per+suäs]ão (1996); [per+suäs]iv+o (2001', 2004) ~ [per+suäs]iv+o (1996)

他方、上例のうち年代の古い 1957 に音声表示の記述があるものは語根母音 *a* がすべて弱化母音となっている点が注目される。

[ab+läch]ão; [co+läch]ão; [de+läch]ão, [de+lät]or; [di+lät+a]r, [di+läch]ão, [di+lät]óri+o; [trans+läch]ão; [dis+suäs]ão, [dis+suäs]iv+o, [dis+suäs]or, [dis+suäs]óri+o; [per+suäs]ão, [per+suäs]iv+o, [per+suäs]iv+a; [e+väd+i]r; [e+väs]ão, [e+väs]iv+o, [e+väs]iv+o; [in+väd+i]r, [in+väs]ão, [in+väs]óri+o

Barbosa (1988: p.353) の記述はこの点で非常に興味深い。なぜなら、上例のうち [dis+suas]ão (≈ [dis+suad+i]r) と [per+suas]ão (≈ [per+suad+i]r) のみについてはあるが、「… [a] の使用は… *dissuasão*, *persuasão* のような語に拡大しており、そこでは標準的な [e] と交替を示す…」と記されており、この記述と上例を鑑みると、[動詞語基+無幹母音] + [接尾辞 -ão, -iv-, -or, -óri-] という形態的文脈にある動詞語根母音 *a* の非弱化は、通時的に進行中の事象であると考えられるからである。

では、なぜこのような現象が進行中なのであろうか、この非弱化現象は、たとえば語根 *-lat-* (≈ *-fer-*) のみがこのような現象を示しているのなら、語彙的な特殊性 *idiosincrasia* ともいえよう。だが、これと平行して語根 *-vas-* (≈ *-vad-*) や *-suas* (≈ *-suad-*) も同じ現象を呈しており、かつ、これらは「幹母音を介さない接尾辞付加」という点で形態的文脈がすべて同一である。したがって「ある特定の形態的な条件の下で非弱化が生じやすい傾向がある」といえるのではなかろうか。そこで以下では、この観点に沿った解釈を試みることにする。

ポルトガル語には上で見た諸形式の他にも、[動詞語基+無幹母音] + [接尾辞 -ão, -iv-, -or, -óri-] という形態的構造を有する名詞・形容詞が存在する。次はそのいくつかの例である。

$[\underline{\text{ãg}}+i]r$	$\approx [\underline{\text{ãç}}]ão; [\underline{\text{ãt}}]iv+o; [\underline{\text{ãt}}]or$
$[\underline{\text{fãz}}+e]r$	$\approx [\underline{\text{fãç}}]ão \sim [\underline{\text{fãcc}}]ão; [\underline{\text{fãt}}]or; [\underline{\text{cale}}+\underline{\text{fãt}}]óri+o$
$[\underline{\text{trãz}}+e]r$	$\approx [\underline{\text{trãç}}]ão; [\underline{\text{trãt}}]or; [\underline{\text{trãt}}]óri+o$
$[\underline{\text{a}}+\underline{\text{trã}}+i]r$	$\approx [\underline{\text{a}}+\underline{\text{trãç}}]ão; [\underline{\text{a}}+\underline{\text{trãt}}]iv+o$

これらも、 $[\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãd}}+i]r \approx [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]ão$ などと同じように、語根母音 a が、[動詞語基+幹母音] + [接尾辞 $-r$] では弱化母音 $ã$ で実現されるのに対して [動詞語基+無幹母音] + [接尾辞 $-ão, -iv-, -or, -óri-$] では非弱化母音 $ã$ で実現される。しかしながら、これらの非弱化母音 $ã$ は、次のように、末子音の脱落や末子音から頭子音への再音節化による代償延長によって語根母音が音韻的長母音となったものと考えられる（次例の $\{ \}$ は音節化 *silabificação* を示す）。

$[\underline{\text{fãç}}]ão$	$: \{ \overset{''}{\text{fãç}} \} \{ \overset{''}{\text{ção}} \} > \{ \overset{''}{\text{fã}} \} \{ \overset{''}{\text{ção}} \} > \{ \overset{''}{\text{fã}} \} \{ \overset{''}{\text{ção}} \}$
$[\underline{\text{fãçç}}]ão$	$: \{ \overset{''}{\text{fãç}} \} \{ \overset{''}{\text{ção}} \} > \{ \overset{''}{\text{fã}} \} \{ \overset{''}{\text{çção}} \} > \{ \overset{''}{\text{fã}} \} \{ \overset{''}{\text{çção}} \}$
$[\underline{\text{a}}+\underline{\text{trãt}}]ivo$	$: \{ \overset{''}{\text{ãç}} \} \{ \overset{''}{\text{ti}} \} \{ \overset{''}{\text{vo}} \} > \{ \overset{''}{\text{ã}} \} \{ \overset{''}{\text{ti}} \} \{ \overset{''}{\text{vo}} \} > \{ \overset{''}{\text{ã}} \} \{ \overset{''}{\text{ti}} \} \{ \overset{''}{\text{vo}} \}$
$[\underline{\text{trãt}}]or$	$: \{ \overset{''}{\text{trãç}} \} \{ \overset{''}{\text{tor}} \} > \{ \overset{''}{\text{trã}} \} \{ \overset{''}{\text{tor}} \} > \{ \overset{''}{\text{trã}} \} \{ \overset{''}{\text{tor}} \}$

ゆえに、このような音韻的環境が不在であるにも関わらず非弱化が通時的に進行中の $[\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]ão$, $[\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]iv+o$, $[\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]or$ などの $ã$ は、これらとは事情が異なっている。このような語根母音 a は、音韻的条件付けではなく、むしろ音韻的短母音と長母音が交代する範列： $[\underline{\text{ãg}}+i]r \approx [\underline{\text{ãç}}]ão; [\underline{\text{ãt}}]iv+o; [\underline{\text{ãt}}]or$ などの類推から 2 モーラ母音化しつつあるのではなかろうか。

旧範列： $[\underline{\text{dis}}+\underline{\text{suãd}}+i]r \approx [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]ão; [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]iv+o; [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]or$
↓
新範列： $[\underline{\text{dis}}+\underline{\text{suãd}}+i]r \approx [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]ão; [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]iv+o; [\underline{\text{dis}}-\underline{\text{suãs}}]or$

他方、これとは逆のパターンで、末子音の脱落や末子音から頭子音への再音節化による代償延長を経て 2 モーラ母音になったと考えられる語根母音が 1 モーラ化しつつある次のような事例も存在する。

$[\underline{\text{co}}+\underline{\text{ãt}}+\underline{\text{a}}]r$ (2004)	$\approx [\underline{\text{co}}+\underline{\text{ãç}}]ão$ (1957, 2001 ¹ , 2004); $[\underline{\text{co}}+\underline{\text{ãt}}]iv+o$ (2001 ¹ , 2004);
	$[\underline{\text{co}}+\underline{\text{ãt}}]or$ (2001 ¹ , 2004)
$[\underline{\text{ex}}+\underline{\text{trãt}}+\underline{\text{a}}]r$ (2001 ¹) ~ $[\underline{\text{ex}}+\underline{\text{trãt}}+\underline{\text{a}}]r$ (2004)	$\approx [\underline{\text{ex}}+\underline{\text{trãç}}]ão$ (1957, 1996, 2001 ¹ , 2004); $[\underline{\text{ex}}+\underline{\text{trãt}}]iv+o$ (2001 ¹ , 2004);
	$[\underline{\text{ex}}+\underline{\text{trãt}}]or$ (2001 ¹ , 2004)

[im+päct+a]r (2004)	≈ [im+päcc]ão (2004)
[ol+fät+a]r (2004)	≈ [ol+fäç]ão (2004) ~ [ol+fäcc]ão (2001 ¹); [ol+fät]iv+o (2004) ~ [ol+fäct]iv+o (2001 ¹)
[cäpt+a]r (1957, 1996, 2001 ¹ , 2004)	≈ [cäpt]or (2001 ¹ , 2004); [cäpt]ur+a (1957, 2001 ¹ , 2004)
[räpt+a]r (1957, 1996, 2001 ¹ , 2004)	≈ [räpt]or (1957, 2001 ¹ , 2004) cf. [räpt+a]dor (2001 ¹ , 2004)

これらの例でも、やはり ${}^{\mu}[\text{ag+i}]r \approx [{}^{\mu}\text{a}\check{\text{c}}]ão$; ${}^{\mu}[\text{at}]iv+o$; ${}^{\mu}[\text{at}]or$ などの範列との類推から次のように動詞不定詞の語根母音が1モーラ母音化しつづくと考えられ、形態的類推による語根母音の2モーラ化という上記の考え方を裏付けているように思われる。

旧範列 : ${}^{\mu}[\text{ex+trat+a}]r \approx [{}^{\mu}\text{ex+tra}\check{\text{c}}]ão$; ${}^{\mu}[\text{ex+trat}]iv+o$; ${}^{\mu}[\text{ex+trat}]or$
 ↓
 新範列 : ${}^{\mu}[\text{ex+trat+a}]r \approx [{}^{\mu}\text{ex+tra}\check{\text{c}}]ão$; ${}^{\mu}[\text{ex+trat}]iv+o$; ${}^{\mu}[\text{ex+trat}]or$

3-3. 音韻的観点：語根母音が先行母音と母音接続をなす派生語

語根母音 / \acute{e} / / $\acute{\epsilon}$ / は、たとえば *baetilha*, *ajaezar*, *alienar*, *enviesar*, *admoestar*, *amoedar*, *duetista*, *duelista* のように母音接続 *-ae-*, *-ie-*, *-oe-*, *-ue-* におかれた場合、接尾辞による派生や動詞活用において強勢が付与されなくても、現代 PE では弱化しないのが一般的である。

$ba[\acute{\epsilon}]t-a \approx ba[\acute{e}]t-ilha$ (2001¹, 2004); $ja[\acute{\epsilon}]z \approx a-ja[\acute{e}]z-ar$
 $ali[\acute{\epsilon}]n-a \approx ali[\acute{e}]n-ar$ (1957, 2001¹, 2004); $vi[\acute{\epsilon}]s \approx en-vi[\acute{e}]s-ar$ (1957, 2001¹, 2001², 2004)
 $admo[\acute{\epsilon}]st-a \approx admo[\acute{e}]st-ar$ (2001¹, 2004); $mo[\acute{\epsilon}]d-a \approx a-mo[\acute{e}]d-ar$
 $du[\acute{\epsilon}]t-o \approx du[\acute{e}]t-ista$ (2004); $du[\acute{\epsilon}]l-o \approx du[\acute{e}]l-ista$ (2001¹, 2001², 2004)

他方、1957 ではこれらの例の多くは弱化母音の [i] ~ [i] で記述されていることから (*a-ja[i]z-ar*; $ba[i]ti-lha$; $admo[i]st-ar$; $a-mo[i]d-ar$; $du[i]l-ista$)、この現象も通時的に進行中の現象と考えられよう。また起動相を表す接尾辞 *-ec-*, *-esc-* の母音は、全資料において、 $esma[\acute{\epsilon}]ce \approx esma[i]cer$ (= $es+ma+ec+e \approx es+ma+ec+e+r$), $esva[i]cer$ (= $es+va+ec+e \approx es+va+ec+e+r$) のように自らより広い母音の後では弱化を示すのに対し、 $aqui[\acute{\epsilon}]sce \approx aqui[\acute{e}]scer$ (= $a+qui+esc-e \approx a+qui+esc+e+r$) のように自らより狭い母音の後では非弱化を示すことから、母音接続だけが非弱化を決定するのではなく、そこには語基と接辞の別や、先行する母音との開口度の大小関係も関わっているように考えられ、今後、より詳細な検討を要する事例である。

4. 終わりに

本論考では主として意味論的・形態論的・音韻論的な観点から、無強勢語根母音の非弱化を示す形態を「負の暗示的意味を有する派生語」「動詞語基への直接的な接尾辞付加による派生名詞・形容詞」「語根母音が母音接続をなす派生語」の3つに分類してそれぞれ考察を加えた。だが、非弱化に関与していると考えられる要因はこれら3-1, 3-2, 3-3の他にも存在する。たとえば「語種：ギリシャ語・ラテン語の借用語基から派生した専門語・教養語では非弱化が多い」「語形成の時期：比較的新しい時期に造語されたものは非弱化が多い」「末子音 *l* の前：この環境では従来に増して非弱化母音が増えつつある」「絶対語頭：この位置では従来の *o* の非弱化に加え、*e* の非弱化も一般的になりつつある」「地名・人名を派生基部とする形容詞：特に外国地名・人名の場合に非弱化が多い」などがそうである。本論考の諸例や、ここでは詳細には取り上げられなかったこれらの例を考慮すると、現代標準 PE における無強勢母音の音質弱化は「強勢の不在」だけで自動的に決定される現象ではなく、これを必要条件としながらも、多角的観点から検討していかなければならない現象であるといえよう。

¹ 本稿は、日本ロマンス語学会第44回大会（青山学院大学2006年5月14日）における口頭発表に基づいて執筆された。

² 詳細は牧野（2006¹）を参照のこと。

³ 2004では [a]gu-aç-al の非弱化に対して [v]gu-aça が弱化しているが、これは語頭の *a* が前者では副次強勢を付与されるのに対し (agua'çal), 後者 (a'guaça) では主強勢との衝突により副次強勢付与が回避されることと関係があるかもしれない。

⁴ 2006年9月24日現在、<http://ciberduvidas.sapo.pt/php/resposta.php?id=5100> で閲覧可能である。

⁵ 幹母音の付加を除き、他の接辞の付加を必要とせずに語としての単独使用が可能な形態素を自由形態素と呼ぶことにする。

⁶ 動詞語根 *-fer-* (ex. [con+fer+i]r, [di+fer+i]r, etc.) は、その派生名詞・派生形容詞において *-lat-*, *-laç-* と交替する (ex. [co+lat]or, [co+laç]ão, [di+lat]óri+o, etc.)。この交替は英語の *go* ≈ *went* などと同様の補充法であると考えられるが、語根 *-fer-* の交替形である *-lat-*, *-laç-* においては *a* が語根母音であり、これらの形態の直後に幹母音を介さずに接尾辞 *-ão* (← *-ion*), *-or*, *-iv-*, *-óri-* などが直接付加される構造は他の形式と変わりがないのでここで取り上げている。

【参照辞書（年代順）】

Fonseca, Fernando Venâncio Peixoto da (1957): *Dictionnaire Français-Portugais / Portuguais-Français* Apollo. Paris, Larousse.

Porto Editora (1982): *Dicionários «Editora» Dicionário da Língua Portuguesa 5.ª edição*. Porto, Porto Editora.

Larousse (1996): *Larousse de Poche Dictionnaire Français-Portugais / Portuguais-Français*. Paris, Larousse.

Academia das Ciências de Lisboa (2001): *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporâneo*. Lisboa, Verbo.

Porto Editora (2001): *Dicionários Editora da Língua Portuguesa*. Porto, Porto Editora.

Houaiss, Antônio (2001): *Dicionário Eletrônico Houaiss da Língua Portuguesa*. Editora Objetiva.

Graciete Teixeira (direcção editorial) (2004): *Grande Dicionário da Língua Portuguesa*. Porto, Porto Editora.

【参照・引用文献】

BARBOSA, Jorge Morais (1988): “Notas sobre a pronúncia portuguesa nos últimos cem anos.” In: *Biblos* LXIV. Coimbra, Universidade de Coimbra, pp.329-382.

MATEUS, Maria Helena Mira e Ernesto d'Andrade Pardal (2002): *The Phonology of Portuguese*. Oxford University Press.

RIO-TORTO, Maria Graça (1998): *Morfologia Derivacional: Teoria e Aplicação ao Português* (Colecção Linguística 12). Porto, Porto Editora.

池上岑夫 (1984) 『ポルトガル語とガリシア語』, 大学書林.

窪園春夫・本間猛 (2002) 『音節とモーラ』, 研究社.

牧野真也 (2006¹) 「現代ポルトガル語の音韻的な短母音と長母音に関する試論—モーラ理論の観点から」.

Encontros Lusófonos No.7, 上智大学ポルトガル・ブラジル研究センター, pp.45-52.

----- (2006²) 「ポルトガル語の硬口蓋子音前に現れるヨッドの非線状の音韻解釈」. 『ロマンス語研究 39』, 日本ロマンス語学会, pp.21-30.